

『第5回理科教育賞』の各賞が決定いたしました



<大賞>

— 盾と副賞 100万円 —  
神奈川県 横浜市立権太坂小学校

『一人ひとりが自分のよさを生かし、互いにかわり高めあひながら自分の生き方を切り拓いていく子どもの育成をめざして～めざす子どもの姿に近づぐための支援の在り方～』



中央 武田校長、右 佐藤教諭

横浜市立権太坂小学校 校長 武田 浩美

この度、理科教育賞大賞を受賞できましたことを、児童・職員・保護者・地域の方々と共に喜びを分かち合いたいと思います。また、これまでの研究に対して多大なるご支援を頂きました日産財団様に深く感謝申し上げます。

本校では「めざす子どもの姿に近づぐための支援の在り方」をテーマに、4年前から理科・生活科を通して子どもの問題解決能力の育成に取り組んできました。校内研究で理科を初めて取り組んだ4年前、児童の学力は横浜市の平均を下回っていました。しかし、日産財団様の助成を受け、問題発見・予想・方法・実験・考察など問題解決の各プロセスにおいてめざす子どもの姿を明確化し、そこに対する教師の支援の在り方について研究を深めてきました。一人一実験の提供、妥当性のある表現活動によって理科好きの子どもたちが増え、自分の考えに自信をもって発表する姿が多く見られるようになりました。理科の学力も横浜市の平均を上回ることができ、子どもの意識・学力の向上が見られたことはこの2年間の成果と言えます。

今回の受賞を励みに、これからも校内研究を通して日々の授業改善に取り組んでいきたいと思います。

<理科教育賞> — 盾と副賞 50万円 —

福岡県 北九州市立企救中学校

栃木県 下野市立石橋北小学校

福島県 福島市立岡山小学校



中央 立花校長、右 竹原主幹教諭



中央 坂口校長、右 荒川教諭



中央 先崎校長、右 猪狩教諭

<理科教育賞(ポスターセッション)>

— 盾と副賞 20万円 —



神奈川県  
伊勢原市立桜台小学校

中央 永山教頭、右 海野教諭

公益財団法人日産財団 第5回理科教育賞の選定 <講評>

選考委員長 西本 清一



日産財団の「理科教育助成」プログラムでは、幼・小・中学校から提案された理科教育の創意に富んだ実践研究課題を選定するとともに、2年間の取組を通じて理科教育の質の向上につながる優れた研究成果をあげた助成校に「日産財団理科教育賞」を授与している。第5回理科教育賞の選考に当たった選考委員の一致した評価として、各助成校における理科教育実践研究のレベルが顕著に高まり、ポスターセッションを含む成果発表のスキルも圧倒的に向上した点を特に指摘しておきたい。これまで助成を受けた各校のGood Practice（すぐれた取組実績）が着実に波及し共有された結果の反映であると思われる。

選考委員会では、2014年度「理科教育助成」対象校に選ばれ、2年間(2015～2016年度)の取組を終えた神奈川県11校、福岡県7校、栃木県4校、福島県10校、合計32校から提出された中間報告書と最終成果報告書による第一次および第二次書面選考を経て、第5回理科教育賞候補4校を選定した。これら4校による成果発表会が7月26日、横浜ベイシエラトンホテル&タワーズで開催され、理科教育の実践を通じて優れた成果をあげた1校を『第5回理科教育賞 大賞』に認定した。また、選考委員会が選んだ理科教育賞候補4校を除く28助成校の成果を発表したポスターセッションにおいて、全助成校の先生ほか贈呈式参加者の投票により最多得票を得た1校を第5回理科教育賞(ポスターセッション)に選定した。これらの選考過程を経て、下記の各賞受賞校を選定した。

【第5回理科教育賞 大賞 1件】

神奈川県 横浜市立権太坂小学校:理科の学力・学習状況調査結果を踏まえ、理科の指導力改善を目標に掲げ、「目指す子どもの姿」とそれを引き出す「教師の手立て」を明確化した一覧表を作成し、その共有化を図りつつ、質の高い教育を実践した。実験・観察に対する関心度、文章や図を使った結果の記述・表現等、主体的に取り組む姿勢を指標とした児童の変容を定量化することにより、教育実践の効果を検証しており、他校にも波及可能な成果をあげた点が高く評価された。

【第5回理科教育賞 3件】

福岡県 北九州市立企救中学校:書き方のルールを共有した「ノートづくり」の段階的指導を通じて、板書に沿った「書く力」、ならびに授業中の話しを「聴き取って記録する力」を育てる基本的なリテラシー教育手法を理科の教育実践に適用した結果、ノートを効果的に活用する場面が醸成されるなど、2年間の教育実践で生徒たちに大きな変容がもたらされた。教材・教具や学習環境の改善など、学習インフラの整備と相俟って、生徒たちの主体性が養われた点が評価された。

栃木県 下野市立石橋北小学校:2～4人の児童当たり1台のタブレット端末を割り当て、生活科と理科の教育場面に応じて効果的な活用を図る独自の教育法を開拓した。実験・観察の過程や結果を文字で記録すると同時に、画像や映像をタブレット端末でも記録し、文字情報に画像・映像情報を付加することによって、児童の言語活動を活性化・充実させており、他校にも波及可能な成果をあげた点が評価された。

福島県 福島市立岡山小学校:理科にとって必須の先行経験が欠落せざるを得ない環境に遭遇した不可抗力な現実を踏まえ、単元の導入部で眼前の事象に対する矛盾を児童に感じさせ、矛盾の解決に向けた追求意欲を喚起し得る教材の提示を心がけ、観察や実験を通して矛盾解決に導く独自の授業スタイルを確立した。必ずしも満足とはいえない環境下で児童に寄り添った理科教育を実践し、学ぶ喜びを実感させ、理科の概念を再構築することに成功した点が評価された。

【第5回理科教育賞(ポスターセッション) 1件】

神奈川県 伊勢原市立桜台小学校:理科教育の基本である自然の観察や実験の記録にタブレット端末等の機器を効果的に活用した理科学習指導法を創意工夫し、児童が主体的に考える力を引き出した取組実績が評価された。

